

飯島賢二の『恐縮ですが...一言コラム』

第 463 回 震災から、今日で 1 年！

2012. 3.11

がれき受け入れ86%が難色 放射性物質の拡散懸念

東日本大震災をめぐる共同通信が実施した全国自治体アンケートで、岩手、宮城両県の瓦礫の受け入れについて、回答した市区町村の33%が「現時点では困難」、53%が「まったく考えていない」とし、全体の86%が難色を示していることが3日分かった。11日で震災1年を迎える中、放射性物質が拡散するとの懸念がくすぶり、広域処理は進んでいない。2014年3月末までに処理を終える政府目標の達成は困難な情勢だ。……こんな記事を読んだ。

今日、2012年3月11日で、震災から1年が過ぎ去った。

日本国中が立ち上がり、みんなで何とか復興しよう！そんな機運が盛り上がったような気がしていた。

そして、合言葉は『絆』。絆、つながり、頑張ろう日本！ いずれの言葉にも、“美德”がある。しかし、上記の記事を読むと、美しすぎるその言葉を使うことに、酔いしれ過ぎた1年だったんじゃないか、と思ったりもする。絆とか、他人を思いやる気持ちが高まった、とは必ずしも言い切れない現実があるような気がして、仕方がない。

東京電力福島第1原発事故についての「福島原発事故独立検証委員会」（民間事故調）報告書の内容をみて、多くの国民は、官邸機能の危うさに身の凍るような思いに至ったのではないだろうか。「政治主導」「官邸主導」をうたってきた民主党政権の危機管理が、これほどお粗末だったとは - と驚かされる。

問題は、1年経った今でも、その信頼回復が全くできていないということだ。

やっと立ち上げた「復興庁」構想も、案の定、仏創って魂いれず…形だけの場当たり政策。政府与党の政治家も官僚も、誰一人被災者の心に接していない。顔を見ようとしていない。形だけのパフォーマンスは、震災前と何ら変わっていない。

そんな中、野田佳彦首相は今月3日、海外メディアのインタビューに応じ、停止中の原発について「政治判断して、稼働をお願いせねばならない時は、政府を挙げて自治体の理解を得るべく全力を尽くす」と強調した。

やるのかやめるのか、原発政策の曖昧さを助長するだけの言動が、益々国民を不安に陥れること、なぜ分からないのだろうか。復興を増税でとばかり、正義ズラで政治生命を懸けると消費税アップを説く首相に、国民は何も期待できなくなった。

これが震災後1年経った、我国の政治の現状である。せっかく盛り上がった「絆」の思いも、国民の気持ちは、不安と不信で、すっかり冷え切ってしまった。

なんとしても、一刻も早く復興しようという「熱さ」が、民主・自民含め今の政治家からは伝わってこない。だからつい、「人はコップに水が無くなった時にしか、その水の大切さが分からない」と言う、本性をさらけ出してしまった結果が、冒頭の調査かもしれない。

震災から1年、日本人はどう進化したのだろうか？

改めて「合掌」